

前号目次

■「語り部」生成の民俗誌にむけて——「語り部」の死と誕生、そして継承／川松あかり ■珍奇なるものから平凡なものへ——柳田國男における民俗学と民族学の位相／岩本 通弥 ■夏目漱石『草枕』における「逸民」表象／齊 金英 ■約束の意味と主体の生——ハンナ・アーレントにおける「現れ」の行為論から／宮田晃碩 ■回帰するモダニズム——単色画と韓国美術の展開／鍵谷 伶 ■「境界」の画家、裨雲成に関する一考察——ヨーロッパでの制作活動における日本との関連性を中心に／申 改正 ■明治大正期日本のアートドキュメンテーション——美術批評家・岩村透による国内外美術情報の構築とその思想(下)／今橋 映子 ■山田正隆訳『回世美談』と明治初期翻訳小説／飛田 英伸 ■久保田藩士狩野家と戊辰戦争——狩野亨吉博士遺蔵文書の新資料をめぐって／川下 俊文 ■一条兼良における『日本書紀』『神代』解釈の態度——「神」解釈をめぐって／徳盛 誠

編集後記

『超域文化科学紀要』第24号をお届けします。本号には3本の論文を掲載しました。うち2本は超域文化科学専攻の教員、1本は博士課程の大学院生による論文です。巻末には、本専攻の教員による平成30年度(2018年度)の研究・教育・学内行政の業績を収録しています。

本号の表紙、中表紙、裏表紙には、もの派を代表する美術家で今年亡くなった関根伸夫(1942-2019年)の版画の画像を用いました。それぞれ、《Project A クレムリン(赤の広場におけるモニュメントのProject)》、《Project B ローマ(重力に反する自然石をつかむProject)》、《Project C 立ち木(1本彫りによる立木のProject)》になります。いずれも1977年に制作した作品で、素材・技法は紙・エッチング、1981年に関根が代表を務めた環境美術研究所から購入したもので、駒場博物館が所蔵しています。マット台紙の内側の寸法はそれぞれ69.0×53.0 cm、66.0×54.5 cm、61.6×48.5 cmとなっています。

関根の初期作品を網羅した作品集『関根伸夫 1968-78』(ゆりあ・べむべる工房、1978年)によると、これらの作品の題名はそれぞれ、《プロジェクトクレムリン》、《プロジェクトローマ》、《プロジェクト立木》となっています。埼玉県立近代美術館で開催された現代版画センターに関する展覧会のカタログ『版画の景色—現代版画センターの軌跡 テキスト・ブック』(埼玉県立近代美術館、2018年)にも、若干異なるものの、ほぼ同様の題名が付いています(18ページ)。「関根伸夫」や『版画の景色』に掲載されているのは、現代版画センターが発行した版画作品で、100のエディションが付いています。

駒場博物館の所蔵作品は、通常エディションナンバーが記載されている作品下部にAPと書いてあることから、関根本人が手元に持っていたアーティスト・プルーフであることが分かります。「版画の景色」によると、現代版画センター版は、シート寸法がそれぞれ66.1×50.1 cm、66.0×50.2 cm、66.0×50.0 cmとなっており、駒場博物館の所蔵作品はそれよりも一回り大きく、イメージの広がりを感じさせます。

《Project B ローマ》に描かれた積層の石は《空相—石をつむ》(1970年、個人蔵)(ただし石の数は7個ではなく9個)として、《Project C 立ち木》に描かれた、繋がっている立木は《空相—立木》(1972年、作家蔵)等として、関根は小規模な彫刻作品を実際に制作しており、さらに、《Project A クレムリン》を含め3つとも、ゼロックス(1971年)や水彩(1974年)でも制作しています。

関根の作品は、公共空間に置かれた巨大な彫刻作品を夢想する点で、クレス・オルデンバーグの「空想のモニュメント」のドローイングと平行していますが、オルデンバーグがドローイングに示されたアイデアの実現に向かったのに対して(実際に実現したものも少なくありません)、関根は、小規模作品、ゼロックス、水彩、版画などと複数の媒体の間を行き来して、その中でアイデアを変化させています。駒場博物館所蔵の版画作品は、関根の思考実験の複雑な軌跡を考える上で重要な意味をもつ作品であると言えます。

画像の使用にあたっては、関根庸子様、梅津元様(埼玉県立近代美術館)、鍋木あづさ様、折茂克哉様(駒場博物館)にご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。関根の3作品の著作権は関根庸子様に属します。

(K. K.)